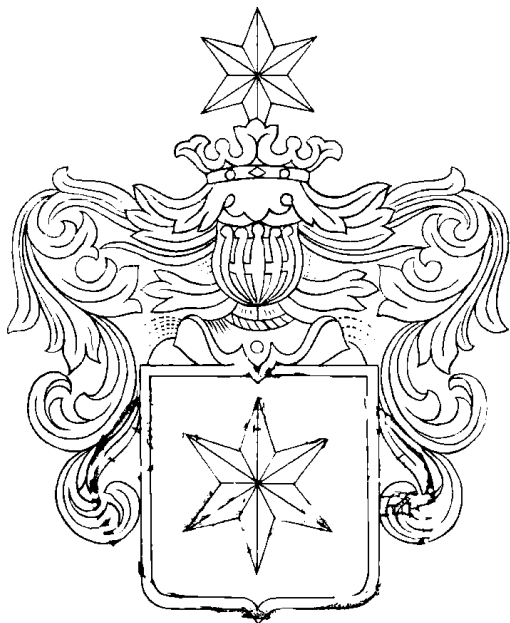


# Goethes Werke



ゲーテ全集  
7

潮出版社

# Goethes Werke

## ゲーテ全集 7

1982年 8月15日 印刷 1982年 8月25日 発行

訳者 前田 敬 作  
今村 孝

発行者 富岡 勇 吉

発行所 株式会社 潮出版社  
東京都千代田区飯田橋3-1-3 (〒102)  
電話 販売部(03)230-0741  
出版部(03)230-0781  
振替 東京 5-61090

定価 3200円

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

© 1982, Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

目次

ヴェイルヘルム・マイスターの修業時代

前田敬作  
今村孝訳

5

総目次	解説	訳注
575	565	548



ゲーテ全集  
第七卷

装幀・中林洋子

ヴイルヘルム・マイスターの修業時代





## 第一卷

### 第一章

芝居は、ひどく長びいていた。婆やのバルバラは、いどこか窓ぎわに行つては、そろそろ馬車の音が聞こえそうなものだかと耳をすました。今日の芝居の切り狂言で若い士官の役に扮して観客を熱狂させた美しい女主人マリアーネの帰りを待っているのである。ほんのかるい夕食を用意しておくだけだというのに、今夜はいつになく待ちわびた。若くて金持の商人ノールベルクから、遠く離れていても恋人のことは忘れていないというしるしに、郵便で小包がとどいていて、この小包で女主人を一刻も早くおどろかせてやりたくてむずむずしていたのである。

バルバラは、たんに女中というだけでなく、親しい友人で相談相手でもあり、マネージャーをかね、所帯のことまでまかされていたので、当然郵便物の封を切つてもよいことになつていた。それに、かねてから気前のよいバトロンの機嫌をとりむすぶことには当のマリアーネ以上に気をつ

かっていただけに、今夜も小包をあけてみたいという好奇心をおさえることができなかつた。封をといてみると、はたしてマリアーネにはすばらしいモスリンの布地一反と最新流行のリボンがいくつか、バルバラのためにはキャラコ一反と何枚かのネツカチーフ、それにひと包みのお金がそえてあつた。この贈りものにすつかりうれしくなつたバルバラは、旅路にあるノールベルクのことを好意と感謝の氣持で思ひだした。そして、マリアーネが帰つてきたら、ノールベルクのことをできるだけほめそやし、彼女が彼からどれほどの恩義にあずかり、彼のほうでも彼女の誠意にどれほど希望と期待をかけているにちがいないかを言つてきかせてやろうと、ころをはずませた。

モスリンの布地は、なかばほどこけたリボンの色に引き立てられて、まるでクリスマス・プレゼントのように小卓のうえにのせてあつた。ろうそくを何本か立てると、いつそうはなやかに見えた。こうして準備万端ととのつたとき、マリアーネの足音が階段に聞こえて、バルバラは、いそいで出むかえた。が、彼女は、ひどく面くらつて、あとずさりした。士官服のままのマリアーネは、バルバラの抱擁には眼もくれずに、押しつけるようにしてそばを通りぬけると、ただならぬあわただしげな身ぶりで部屋のなかに入り、羽根かざりのついた帽子と剣をテーブルのうえに投げだし、落ち着かなげに歩きまわるばかりで、せつかくともしたろうそくなど見ようともしなかつた。

「どうしたんです、マリアーネ」と、バルバラはおどろいて叫んだ。「なにかあつたのですか。それ、このブレゼントをごらんなさい。もちろん、いちばんやさしいお友だちから来たにきまっていますよ。ノールベルクさんが、あなたの寢室着にするようにこのモスリンの布地を送ってくださったのです。それに、ご自分も、もうすぐ帰っていらっしやるんですよ。どうやらいつもより熱がこもっているし、いつになく気前よくおなりのようですわね」

婆やがふりむいて、自分にも送られてきた品物を見せようとすると、マリアーネは、それらの贈りものから眼をそらして、はげしい口調で言った。「やめて！ そんなものは、あっちへ持って行ってちょうだい！ 今日、なんにも聞きたくない。いつもは、あなたの言うとおりにしてきただわ、あなたの望みどおりにね。それはそれでかまわない。ノールベルクさんが帰っていらしたら、わたしは、またあの人のものになり、あなたのいい子にもなってあげる。あなたは、わたしをどうなりと好きなようにしたらいいわ。でも、それまでは、自分の思いどおりにしたいの。あなたが口をすっぱくしてまくしたてたって、この気持を変えるのはごめんよ。わたしを愛し、わたしも愛しているあの人のこのわたしをすっかりあげたいの。まあ、なんて顔をするの！ わたしはね、一生一代の恋だとおもって、この情熱に身もこころも焼きつくすつもりなの」

バルバラは、言いかえす文句や理由にはこと欠かなかつ

た。しかし、応酬をつづけているうちについかつてなつてひどい言葉を口走ってしまった。すると、マリアーネは、いきなりとびかかってきて、彼女の胸ぐらをつつかんだ。

バルバラは、大きな声で笑いながら、「すぐまたいつもの裾の長い服に着替えていただかなくてはなりませんね。でない、こちらは、命がいくらあつても足りませんもの。さあ、あちらへ行つて、お召し替えなさい。女の服装にもどつたら、ちよつとのあいだ軍服を着たからといってわたしになさつたこの仕打ちをきつとひらあやまりなさるにちがいありません。さあ、そんな上衣はぬいでしまいなさい。なにかもぬいでしまうのです！ だいいち、そんな衣装では窮屈だし、あなたのためにもよくありませんからね。女だてらに肩章なんかつけているから、ついの怪せあがるんですよ」

バルバラは、マリアーネに手をかけたが、マリアーネは、それをふりほどいて、「そんなにいそがなくてもいいでしょ！ 今日、まだこれからお客さまがあるんですよ」

「弱りましたね」と、婆が答えた。「まさかあのにやけた若造じゃないでしょうね、商人の息子の」

マリアーネは、「そうよ、あの人のよ」

「どうやらきつぷのいい姐御気どりのおいたをなさりたいご様子ですね」と、バルバラはいや味な言いかたをした。

「まだくちばしの黄色い、あのお金もない坊やをずいぶん

とかわいがつておやりですこと。気前のいい大姐御さまなどどちやほやされるのは、さぞかしこたえられないほどいい気分でしょうね」

「いくらでもせせら笑うがいいわ。わたしは、あの人を愛している！ あの人を愛しているわ！ いまはじめてこの言葉を口にして、もう天にものぼったような気持だわ。恋って、舞台ではなんでも演じたけれど、こんなものだとは知らなかった！ ええ、わたしは、あの人のお首つたまに抱きついて、あの人をしつかりつかんでいたい！ いつまでも引きとめておきたい！ あの人にわたしの愛をのこらさざらば、あの人のお愛もすつかりしやぶりつくしたいの！」

「いいかげんになさいよ」と、婆やは落ち着いて言った。「せっかくのご機嫌に水をさすようですがね、ひと言だけ言わせてもらいますよ。ノールベルクさんが帰っていらっしやるのです！ 二週間したら帰っていらっしやるのです！ ほら、これが、贈りものにそえてあつたノールベルクさんのお手紙です」

「たとえあすの日の出とともにあの人がいなくなってしまうとわかっているとしても、そんなことには眼をふさいでいたいの。まだ二週間もあるんですもの！ まだまだ先のことだわ。二週間も先にはどんなことが起こるか、どんな変事があるかわかったものじゃないわ」

と、そのとき、ヴィルヘルムがやってきた。マリアーネは、いきおいよく立ちあがるなり、いそいそと彼のほうに

とんでいった。ヴィルヘルムは、夢中で赤い士官服を抱きしめ、その白い、かわいい縞子のチョッキを自分の胸におしあてた。愛しあうふたりのうっとりとした様子は、とても筆舌にあらわせるものではないし、そんな不粋な真似は、このさい慎むべきであろう。バルバラは、ぶつくさ言いがらもその場をはずした。われわれも、婆やにならってひとまずここを立ち去って、幸福な恋人たちをふたりだけにしておくことにしよう。

## 第二章

あくる日、ヴィルヘルムが母親に朝の挨拶をすると、母親は、お父さまがとてもおこつていらっしやつて、あなたが毎日お芝居に行くのを近いうちに禁止なさるでしょう、と打ち明け、さらに言葉をつづけて、「わたしだつて、ときにはお芝居に行くのが好きだけど、あなたが度はずれに芝居狂いをして、そのために家のなかに波風がたえないようじゃ、お芝居なんて消えてなくなってしまうばい」と言いたくなることもありすよ。お父さまは、いつも口ぐせのように言っているらっしやいます——芝居なんてなんの役にたつのだ、たいせつな時間をむだにしているだけじゃないか、とね」

「そのことなら、ぼくもお父さんから言われましたがね、

ひよつとしたら、ぼくの応対のしかたが短気すぎたのかも  
しれません。しかしね、お母さん、よく考えてみてくださいだ  
さい。直接お金もうけにらないもの、すぐに利益を生みだ  
さないものは、なんでも無益なのでしょうか。それなら、  
ぼくたちの住んでいたもとの家だつて、結構広かつたじゃ  
ありませんか。建てかえる必要なんか、どこにあつたでし  
ょうか。お父さんにしてからが、毎年商売上の儲けのうち  
からかなりのものをつぎこんで、部屋をごてごて飾りたて  
ていらつしやるじゃありませんか。この絹の壁布やイギリ  
ス製の家具類も、なんの役にもたたないものではありませ  
んか。もつと質素なもので満足できないでしょうか。す  
くなくとも、こんな縞模様しまもようの壁や、おなじものがなんどで  
も出てくる花模様や、からくさ模様、つる模様やいろんな  
図柄ずかんなど、正直なところ、ぼくには胸くそがわるくてなり  
ません。せいぜい芝居の緞帳どんちやうと言つたところですね。し  
かし、緞帳どんちやうのまえにすわつているのは、こんな壁布とにら  
めつこしているのはわけがちがいます。どんなに長いこ  
と待たされても、いまに幕があがるだろうということがわ  
かつていますからね。そして、幕があがつたら、いろんな  
出し物が見られて、ぼくたちをたのしませ、啓発し、高め  
てくれるのです」

「それにしても、ほどほどということがありますよ。お父  
さまも、夜分は話し相手がほしいのです。だのに、おまえ  
ときたら芝居にばかり夢中になつて、夜ちつとも家について

くれない、とおもつていらつしやるのです。そして、ご機  
嫌がわるくなると、最後にはわたしがいけないんだという  
ことになつてしまふのです。十二年まえのクリスマスにわ  
たしが買つてあげたばかりにおまえたちに芝居熱を吹きこ  
んだあの人形芝居のことで、なんどお父さまからお小言せうごんを  
頂戴てんたいしたかしれませんよ」

「あの人形芝居のことをわるく言わないでください。ぼく  
たちにたいする愛と思ひやりからしてください。ぼくは後  
悔したりしないでください。あれは、ぼくがこの建つたば  
かりの、まだがらんとしていた家で味わつた最初のたのし  
い出来ごとでしたよ。いまでもあのときのことが眼のまえ  
に見えるようです。ぼくたちは、型どおりのクリスマス・ブ  
レゼントをもらつたあと、となりの部屋に通じるドアのま  
えにおとなしくすわつているようにと言いつけられたとき  
は、なんだかへんだなという気がしたものでした。やがて、  
ドアがあげられました。しかし、いつものようにここから  
出入りするのではありません。ドアの大きさいっぱいにみ  
ごとな飾りつけがなされていて、あつとおどろきました。  
その正面は、高さいっぱいにきずかれています、なにやら  
神秘的なカーテンに隠されています。はじめぼくたちは、  
ずつと離れたところに立つていたのですが、なかば透ちかけて  
見えるカーテンのうしろでびかびか光つたり、かさこそ音  
をたてているものはなんだだろうかと好奇心がたかまつてき  
て、のぞきこもうとしますと、めいめい小さな椅子にすわ

つて、辛抱よく待つように言われました。

こうして、一同が椅子にすわつて、おとなしく待つていますと、合図の笛がなつて、幕がするすると巻きあげられ、朱塗りの神殿が舞台の奥に見えました。祭司長のサムエルが、ヨナタンといつしよに登場してきました。交唱するふたりの奇妙な声は、ぼくにはたいへん莊重なものにおもえました。そのすぐあと、サウルが出てきて、彼とその部下たちに一騎打ちをいどんできた、身うごきならぬほど重たい武器をつけた巨人ゴリアテの不遜で無礼な態度に手をやいています。ですから、エッサイの息子の小さなダビデが羊飼いの杖と袋と石投げ器をもってびよこんととびだしてきて、（無双の王にしてわが君さま、あの男のために勇氣がくじけるようなことがあつてはなりません。もしわが君さまがおゆるしくださいますならば、わたしが出むいていって、あの大男めと勝負をいたしましょう）と言つたとき、ぼくは、胸のなかがすかっとなりました。

こうして第一幕がおわると、見ていたぼくたちは、これからどうなるのかを知りたくてうずうずし、幕間の音楽なんか早くすめばいいのにおもいました。やつと幕がまたあがりました。少年ダビデは、ゴリアテの肉を空の鳥たち野のけものたちの餌食にくれてやると言います。ゴリアテは、ダビデをせせら笑い、しきりに四股をふんだりしますが、結局はまるたん樺のように打ちたおされて、事件はめでたく落着きました。そのあと、イストラエルの娘たち

が、（サウルは千の敵を撃ち、ダビデは万の敵をたおした）とうたい、小さな勝利者ダビデは、巨人の首を運ばせて凱旋し、サウルの美しい娘を妻にするくだりになるわけですが、ぼくは、それをたいへんよろこびながらも、この果報者のダビデがこびとのような小さな人形にしてあるのが不満でなりませんでした。と言いますのは、巨人のゴリアテと小さなダビデという通念にしたがつて、ふたつの人形の大きさをことさらにちがえてあつたからなんです。ところで、お母さん、あの人形たちは、どこへやりましたかね。このあいだ、ある友人にこの子供のころの遊びごとの話をきかせてやったら、ひどくおもしろがつたものですから、人形たちを見せてやると約束してしまつたのです。

「おまえがこの話をそんにはつきりとおぼえているのは、わたしにはちつとも不思議じゃありませんよ。なにしろ、おまえとときたら、すぐに人形芝居に夢中になりましたからね。いまでもおぼえています。おまえは、わたしの眼をぬすんで台本を持ちだし、全部のせりふを暗記してしまいました。わたしがやつとそれに気づいたのは、ある晩、おまえが蠟でゴリアテとダビデの人形をこしらえ、ふたりにそれぞれ大見得を切らせ、最後にゴリアテをひと突きして、その不恰好な首を臘のにぎりのついたピンにさしてダビデの手に持たせるのを見たときでしたよ。わたしは、そのとき、親ばかというのかね、おまえのすばらしい記憶力ともつたいぶつたせりふまわしにすっかりうれしくなつて、す

ぐさまあの人形一式をおまえにあげようと決心したのです。そのおかげでいろいろ不愉快な目にあうようになるだろうなんて、そのときはおもいもしませんでしたよ」

「後悔なんかなさらないでくださいよ」と、ヴィルヘルムは答えた。「ああいうおいたのおかげで、いろいろとたのしいことが味わえたのですからね」

そう言つて、ヴィルヘルムは、母に鍵を出してもらい、いそいで人形たちをしまつてあるところに行くと、人形は生きてゐるのだ、いきいきとした声でせりふを語り、手で糸をうごかしてやると生きたものになるのだと信じていた子供のころの思い出しはらくひたつていた。やがて、人形たちを自分の部屋に持つてあがると、だいじにしまひこんだ。

### 第三章

初恋というものが、よく言われるように、われわれのところが遅かれ早かれ経験することのできる感情のうちでいちばん美しいものであるならば、このただ一度かぎりの体験があたえてくれる喜びをぞんぶんに味わいつくすことをゆるされたわれわれの主人公は、ほかの人びとよりも三倍も幸福であつたと言わねばならない。こういう幸運にめぐまれるのは、ごく少数の人たちだけである。たいていの人

びとは、それ以前の思いこみがわざわざいしてきびしい試験にかけられるだけであつて、恋の喜びをろくすつほ味わいもしないうちに、いちばんすばらしいとおもつていた願ひごともおきらめ、至上の幸福だと夢みていたことも断念せざるをえなくなつてしまふのである。

すてきなマリアーネによせるヴィルヘルムのあつちい思いは、空想力の翼のついでにだいにつのついでいき、しばらく交際をつづけただけで彼女の好意をなびかせて、ところから愛する、いや、崇拜する女性を射とめたのである。彼がマリアーネを崇拜までしたのは、はじめて見たときの彼女が舞台というあやしい光のもとにあらわれてきて、芝居にたいする情熱が初恋に輪をかけたからである。彼の若さは、彼に恋の喜びをあふれるばかりに味わわせてくれたが、この喜びは、いきいきとした空想力によつて、さらに高められ、やしなわれたのであつた。また、マリアーネの身の上も、彼女の態度にヴィルヘルムの情感をかきたてるようなおもむきをそえた。こちらから打ち明けるよりもさきき自分境遇を恋人に見やぶられてしまふのではないかという危惧の思いが、彼女のそぶりに不安と恥じらいとの入りまじつた愛くるしい様子をあたえたのである。ヴィルヘルムにたいする彼女の情熱は、ほんとうに熱烈なものがあつて、彼女の不安でさえも、かえつてその愛情をいっそう強めていらしかつた。マリアーネは、ヴィルヘルムの腕にだかれているとき、この世で最も愛くるしい女であつた。

さて、喜びの最初の陶醉からめざめて、自分の生活や境遇をふりかえてみると、ヴィルヘルムにはすべてのことがそれ以前とはちがひ、なにもかも一新したようにおもえた。義務はより神聖になり、遊びごとはいつそうおもしろいようにおもえ、彼の知識はより明確に、才能はより力強いものになり、さまざまな計画はより確固となつてきたようにおもえた。したがって、父親の非難をかわし、母を安心させ、マリアーネとの愛をおもうさまたのしめるように生活のけじめをつけるのは、造作もないことであつた。昼間は、きちょうめんじに仕事に精をだし、ふだんは芝居もあきらめ、夜は食事をしながら両親のお相手をつとめ、みんなが床についたとみるや、マントにくるまつてこっそり庭から抜けだし、リンドアやレアンダーたち\*のことを思い浮かべながら、いちもくさんに恋人のもとへいそぐのであつた。

ある晩、ヴィルヘルムが小さな包みをさしだすと、マリアーネは、「なにをもつてらしたの」とたずねた。婆やのバルバラも、なにかすばらしい贈りものでももらえるのかとおもつて、期待にはずんだ眼をむけた。ヴィルヘルムは、「わからないだらうな」と答えた。

彼がナブキンにくるんであつた包みをととき、指をひろげたときの大きざぐらいの人形がごたごたとかたまつて出てきたとき、マリアーネはおどろきあきれ、バルバラはたまたまげてしまった。ヴィルヘルムがもつた糸をほぐし、人形

をひとつひとつとりだしてみせようとすると、マリアーネは、大きな声をあげて笑つた。あてがはずれたバルバラは、不機嫌そうにこっそり出ていった。

恋人どうしがたのしい語らいをするのに、たいした道具だては要らない。このふたりも、その晩たいへんたのしい時間をすごした。ささやかな人形の一座の品さだめをし、ひとつひとつ仔細に点検しては、笑いのたねにするのであつた。黒いビロードの上衣を着、黄金の冠をかぶつたサウル王は、どうしてもマリアーネの気に入らなかつた。このサウルは、あまりにしゃちこばつて、しかつめらしすぎるというのである。それだけに、ヨナタンのほうは、そのすべすべしたあごといい、黄と赤の衣装やターバンといい、たいへん彼女の気に入つた。それに、彼女は、たくみにヨナタンの糸をあやつつてあちこちうごかし、お辭儀をさせたり、愛の言葉を語らせるようなことまでしてみせた。これに反して、ヴィルヘルムが予言者サムエルがつけている祭司長の胸あてをほめ、その僧衣の玉虫色の布地は祖母のふるい服からとつたものだといふ話をしてやつても、サムエルにはてんで注意をむけようともしなかつた。ダビデは小さすぎるし、ゴリアテは大きすぎるといふのが、彼女の考えだつた。彼女の眼中にあるのは、ヨナタンだけだつた。彼女は、ヨナタンにしきりにお愛想をふりまき、最後にはその愛撫を人形からヴィルヘルムに移していった。こうして、この夜もまた、たわいもない遊びごとが、幸福な時間



の導入部となつたのである。

ふたりの甘美な夢ごちは、路上で起こつたさわぎによつてやぶられた。マリアーネは、バルバラを呼んだ。婆や、いつものとおりまだ夜なべをしていて、仕立て替えのきく舞台衣装をつぎの出し物に使えるよう縫いなおしているところであつた。彼女が教えてくれたところによると、着いたばかりの新鮮な牡蠣でシャンペンをしたたま飲みすぎた陽気な職人の一行が、となりのイタリヤ酒場から千鳥足で出てきたところだということであつた。

「惜しいことをしたわ、もつとはやく気づかないで！ わたしたちも、なにかちよつとお腹に入れたらよかつたわね」と、マリアーネが言った。

ヴィルヘルムは、「まだやつているだろう」と言つて、ルイ金貨を一枚バルバラにわたし、「なにかおいしいものを買つてきてくださいよ。あんたも、いっしょにお相伴するとよいな」

バルバラは、ぐずぐずしていなかつた。出ていったかとおもうと、品よく盛りつけた軽い食事をテーブルに小ぎれいにならべて、ふたりのまえに運んできた。三人は、食べたり、飲んだりして、たのしくすごした。

こういうときは、話はいくらでもはずむものである。マリアーネは、お気に入りのヨナタンをまたとりだした。バルバラは、ヴィルヘルムの好きなことにうまく話題をもつていった。「あなたさまは、クリスマス晩に人形芝居を

はじめてごらんになつたときの話をまえにお聞かせくださいましたね。あのお話は、とてもおもしろうございました。ちやうどこれからバレーがはじまるというところでお話がとぎれてしまいました。ここにあるのが、そのときみごとな効果を發揮したすてきな人形たちなのでございませぬ」

「そうよ」と、マリアーネも口をはさんだ。「話のつづきを聞かせてほしいわ。そのとき、どんな気持がなさつて」

ヴィルヘルムは、答えた。「マリアーネ、小さい時分のことやむかしの罪もないあやまちを思いだすのは、とても気持のよいものだよ。とりわけ、無事頂上にたどりついて、そこからふりかえつて、自分が登つてきた道を見わたすことができるようなときには、なおさらそうだよ。ぼくたちがしばしばくるしい思いでとてもりこえられそうにもないとおもつたいろんな障害をいま自分に満足しながら思ひかえし、現在の成長した自分と未熟だつた以前の自分とをくらべてみるのは、なんともたのしいことさ。けれども、ぼくがいま口で言えないほどの幸福を感じているのは、マリアーネ、きみを相手に過去のことを語りながら、同時にきみと手をたずさえて歩いていくことのできるすばらしい未来を眼のまえに見ているからなんだよ」

「で、そのバレーは、どうだったのでございますか」と、バルバラが口をはさんだ。「もしかしたらうまうまいかなかつたのではないかという気がいたしますが」